

## お米のはなし

お米や稲に関するちょっとした情報・豆知識を専門家が綴る「お米のはなし」の第46弾をお届けします。

(シリーズ担当：R. I.)

### 第46話 日本のイネの収量

わが国がコメを自給できるようになったのは、そんなに古い話ではなく、今から53年前、昭和42(1967)年のことでした。しかしそのわずか3年後、昭和45(1970)年から過剰米処理が始まり、翌昭和46(1971)年には、コメの生産調整が本格的に実施されるようになりました。

さて、わが国におけるイネの収量の歴史を振り返ってみましょう。江戸時代の日本の反収(約10a当り収量)は、150kg程度だったそうです。

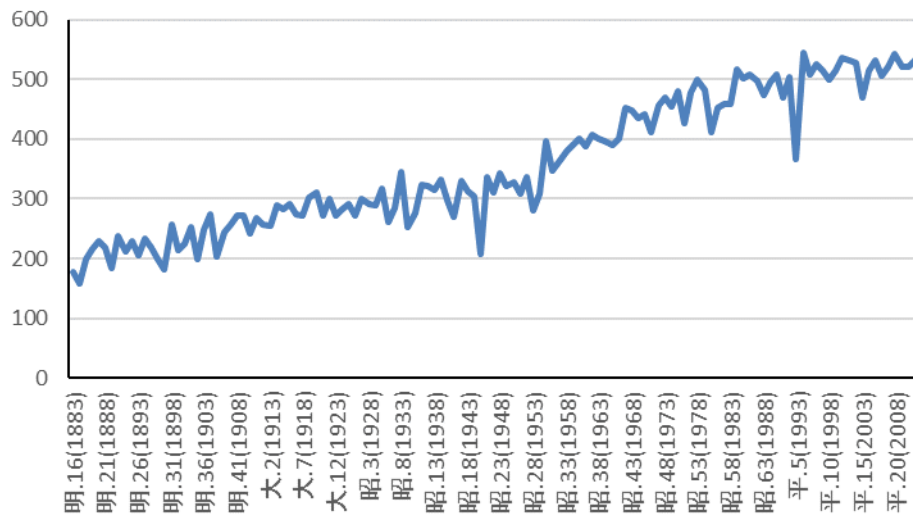


図46-1 我が国水稲平均単収(kg/10a)の推移

作物統計、  
水稲収穫量  
累年統計  
全国(明治  
16年~平成  
24年)公開  
日:2015年  
8月28日か  
ら

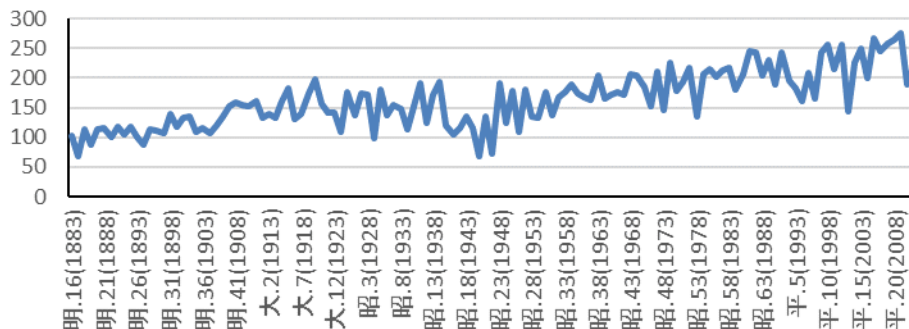


図46-2 我が国陸稲の平均単収(kg/10a)の推移

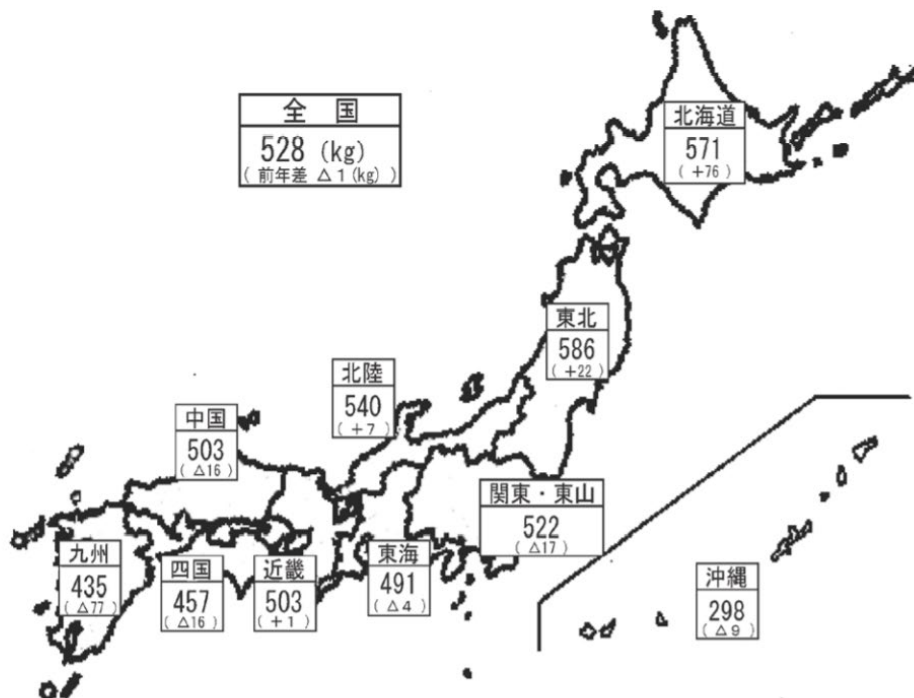
作物統計、  
水稲収穫量  
累年統計  
全国(明治  
16年~平成  
24年)公開  
日:2015年  
8月28日か  
ら

図 46-1 は、記録が残されている明治 16（1883）年から平成 24（2012）年まで 130 年間にわたるわが国イネの平均収量（玄米重、kg/10a）の推移を示しています。明治時代の水稲 10a 当り収量は、200～250kg 程度でした。これが、大正から昭和の初めに掛けて 300kg に増え、昭和 8（1933）年には 350kg に達しました。ところが、太平洋戦争で多くの農業の担い手を奪われ、その上肥料や生産資材も不足したため、コメの生産は停滞します。特に、終戦の昭和 20（1945）年は最悪で 200kg に落ち込みました。また、終戦までは、日本内地の食糧不足を補うため、台湾と朝鮮から大量のコメが移入されました。

戦後は、栽培技術の改善や品種改良が功を奏して、徐々に収量を増やしていきます。そして、昭和 59（1984）年に始めて 500kg の大台に到達したのです。このように、日本では、100 年掛けて収量が 2.5 倍に増えました。それ以来、1993 年の大冷害を除けば、ほぼ毎年 500kg 以上、520～530kg を維持しております。

図 46-2 には、陸稲の平均単収の推移を示しました。陸稲栽培は、イネの生育が天候、特に降雨量に大きく左右されるので、その収量は水稲よりさらに不安定です。最大でも水稲の約 1/2 の収量に届くかどうかです。また陸稲の栽培面積は、昭和 35 年（1960 年）に最大 1 万 8400ha ありましたが、その後どんどん縮小し、平成 24 年（2012 年）には 2110ha になりました。

昨年度（令和元年）の水陸稲地域別収量を見ますと、全国平均 528kg に対して、東北（586kg）、北海道（571kg）、北陸（540kg）が、全国平均を超えています。関東・東山は 522kg と僅かに全国平均に及ばないのですが、これは東山（特に、長野県や山梨県）は高いのですが、関東地方の各県が足を引っ張っているからです。



資料:『令和元年産水陸稲の収穫量』(農林水産省統計部)

→ [https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou\\_kome/index.html#y5](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/index.html#y5)

図 46-3 我が国の地域別イネ収穫量（2019 年）

表46-3 10a当り平年  
収量上位10都道府県

	都道府県	kg
1	長野	619
2	山形	598
3	青森	597
4	秋田	575
5	北海道	550
	福島	
7	山梨	547
8	千葉	544
	新潟	
	富山	
	全国平均	535
1.70mm基準ベース		

都道府県別の平年収量 (kg/10a) 上位 10 は、表 46-3\*のよう  
になります。長野がダントツの首位、次に、東北の山形、青  
森、秋田に福島の 4 県と北海道が続き、さらに山梨、千葉、北  
陸の新潟、富山の 2 県が続いています。長野県は、県歌「信濃  
の国」の 1 番に、「松本、伊那、佐久、善光寺、四つの平は肥  
沃の地」とありますように、県内の主要な盆地で稲作が行われ  
ており、比較的雨が少なく晴天が多い上に、昼間と夜間の気温  
の差、つまり日温度較差が大きい特徴があります。昼間光合成  
で稼いだ同化産物が、夜間の呼吸によって消費されることが少  
ないため、効率よく同化産物を蓄積できるからと考えられま  
す。同様に、東北の日本海側や北海道も、イネの出穂以降に晴  
天の日が多く、光合成が盛んに行われる反面、夜間は冷えるの  
で同化産物の効率よい蓄積を生じるから多収になりやすいと思  
われます。このように、長野県、東北地方（特に日本海側）、  
北海道は、正しく「地の利」によってイネの多収穫を実現して  
いるとも言えます。

\*令和 2 年産水稻の全国農業地域別・都道府県別 10a 当り平年収量

<https://www.maff.go.jp/j/press/tokei/seiryu/attach/pdf/200317-1.pdf> から改写

今回は、米作日本一についてお話する予定でいます。その時、日本一になった篤農家の  
稲作技術のポイントなどについて簡単に説明することにしましょう。

(参考資料)

作物統計 (農林水産省)

URL : [https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou\\_kome/index.html](https://www.maff.go.jp/j/tokei/kouhyou/sakumotu/sakkyou_kome/index.html)